修論要旨

インスピリッツテニスクラブにおけるスポーツ復興に関する研究

米澤　穂高

現代社会において、学校や会社の週休 2 日制などにより多くの人々の余暇が増加している。人々はまた、健康の維持・増進にも関心を深めている。しかしながら、老若男女問わず体力の低下は著しい。また、趣味の多様化などのため、スポーツがライフスタイルの中から消えつつあるように思われる。これからの社会は少子高齢化社会に変化していく。その中で健康の維持・増進、余暇の有効利用、青少年の育成、コミュニティの形成、スポーツ・ボランティアの育成など我々のよき未来を築いていくためにはスポーツは必要不可欠なものだと考えられる。特に地域とスポーツの関わりがさまざまな役割を担っている。

日本の近隣の国である韓国においては、1988 年のソウルオリンピックを機に一般国民のスポーツへの関心が高まった。そして、スポーツ参加人口が増加した。しかし、近年韓国では受験戦争が激しく、スポーツで進学できそうにない生徒は勉学に励むためスポーツへの関心は薄れ、スポーツ離れにつながる可能性が高い。このように青少年のスポーツが低迷すると共にスポーツ振興も遅れ気味である。今後、生涯スポーツ社会を実現するためには、韓国においても「する」スポーツへの関心を増加させる必要がある。〔林・原田 2004：p.p.2-3〕

またスポーツの種目の一つであるテニスの楽しみ方の多様化が進んでいる。しかしながら、テニス界においてもゲームに関する意識は欧米に比べると低い。テニス人口の増加はみられるもののテニスクラブが次々に減少している。そんななかで、2005 年 2 月 2 日、「試合に勝つためのテニスクラブ」としてインスピリッツテニスクラブが設立された。しかし私は、試合に勝つためのテニスクラブだけで良いのだろうか、と考えた。そして、調査を進めていく中で次のような要素がインスピリッツテニスクラブにおけるスポーツ振興に含まれていることが分かった。①スポーツの遊戯性、競争性、身体活動性の要素②試合中心の要素③コミュニティ・スポーツの要素④スポーツ・ボランティアの要素である。さらにそのなかでも 2 点ほど気になったことがある。まず 1 点目は、わが国にたくさんテニスクラブがあるにもかかわらずなぜお客さんはインスピリッツテニスクラブに来るのか、ということである。そこで、2006 年 7 月 14 日から 8 月 14 日にかけて質問紙法によるアンケート調査と聞き取り調査を行なった。そして 2 点目である。これは調査に行っていた際に最も気になった点で、スポーツ・ボランティアの存在についてである。インスピリッツテニスクラブにてスポーツ・ボランティアをしている 1 組の親子にスポットをあてて 2006 年 12 月 18 日から 29 日までインタビュー調査などを行なった。その 2 つの調査を中心にインスピリッツテニスクラブのスポーツ振興について述べていくことにする。

まず第 1 章ではテニスというスポーツの根本的な部分であるスポーツの語源と近代スポーツの概念について述べている。スポーツという言葉は英語を通じて世界に広まったが、本来の語源はラテン語の disportare にある。di 離れる portare 運ぶという意味である。次いでフランス語の desporter となり、そこから 11 世紀にイギリスに伝わり英語の disport、di/dis 離れる port 港、運ぶ、仕事するという意味になった。すなわち、仕事からはなれ自由になるという意味から厳しい仕事から解放されて、大いに遊び、楽しみ、時には戯れるとなった。スポーツは語源的には生活のまじめな場面、あるいは悲しい場面から開放されて楽しむこと、気晴らしをすることを意味していた。この disport が 16 世紀以降 di が取れて現在の sport になったのである。単音節を好むイギリス人が、di を取り去ったといわれている。文献によっては disportare は desportare、desporter は disporter や desporte、disport は dysport と記されていたものもあり、スポーツの原語は何通りかの表し方があったと思われる。また、スポーツを遊猟と捉えることもできる。このことはヨーロッパの風景画からみてとることができる。中世の人々は山に関心が無く、山歩きをしなかった。そのためゴシック風景画の山岳が現実離れして描かれている。しかし、庭の囲いの外に横たわる森は別であった。暗い森は常に中世の人々の想像力の深部にうったえてきた。そして 14 世紀以降になると人々は森へ侵入し始めた。一つは狩猟のためである。自然観察に全面的に拠った最も古い絵は遊猟に関する彩飾写本の中に出てくる。ガストン・フェビュスが 1400 年頃著した『狩猟之書』の森の中の兎たちの小さな絵は真実な愛情をこめて描かれているが、同時にそれは、人間と自然の生命との親密な結びつきは主として殺戮本能を媒介として成就されるということを意味している。狩猟は伝統的に貴族の仕事で、しばしば彼らの唯一の仕事であった。したがって狩猟を主として扱った絵画の様式は貴族的様式であった。それは 1400 年頃フランスとブルゴーニュの宮廷で発達した。そして 15 世紀の新しい世俗芸術は自分たちの新しい関心事を表現するための効果的な形式を月暦画に求めた。このうちのいくつかの情景は狩猟である。貴族的風景画はたちまちイタリアに広がっていった。イタリアにおいてジェンティーレ・ダ・ファブリアーノは国際ゴシック様式を充実化し、ピザネロがそれに究極的意義を与えて、ベリー公の挿絵作家たちの域から大きく枠を広げた。

パオロ・ウッチェロによる狩猟画からもこの時代の想像力、物の感じ方などがみてとれる。ウッチェロの作品は夜の情景を表したものが多いが、ギリシャの壷絵に出てくる人物像のような生気にみちたフィレンツェの若者たちが、森へ侵入し、森がもつ古代のままの静寂を、雄叫びをあげて打破している。

このようにスポーツとは厳しい仕事から解放されて、大いに遊び、楽しみ、時には戯れるという意味や生活のまじめな場面、あるいは悲しい場面から開放されて楽しむこと、気晴らしをすることを意味していた。また、遊猟という意味から中世のヨーロッパの風景画との密接な関係があることも言える。以上がスポーツの語源である。

次に近代スポーツの概念についてである。スポーツは人間が創造し、発展、継承されてきた。特に近代においてはルール、用具、技術などの改善が飛躍的である。そこで近代スポーツの概念についてここで述べておく。スポーツとは抽象的概念であり具体的にはテニ

スや野球、スキー、バスケットボール、サッカーといった個々の種目を念頭に浮かべる。イギリスやアメリカは近代スポーツの発祥の国といわれるように、多くのスポーツを生み育ててきた。日本に柔道や剣道などのスポーツがあるように各国でも伝統的なスポーツが行われてきた。スポーツの意味や内容、範囲は国によって若干異なり、歴史的にも社会的にも変化してきている。例えば、日本の柔道や剣道は、戦後にスポーツとして捉えられるようになったが、戦前はそうではなかった。さらに、スポーツの捉え方はそれを使用する集団や個人によっても異なることもあるなど極めて多様である。このようにスポーツの意味に一義性を求めるのは困難である。しかし、一般にスポーツを特徴づける要素として、遊戯性、競争性、身体活動性の 3 つを指摘することができる。

またテニスは生涯スポーツとしても注目されてきている。そこで、第2章では生涯スポーツの歴史と意義について述べている。わが国では体育という用語がスポーツを包括する上位概念として用いられてきた。体育は教育の一環であり、健康の維持増進や社会性の育成、人間形成など望ましい社会的価値の実現のために行なわれる活動である。これに対して、スポーツは自己目的のために楽しむものである。そんな中1965年、ラングランの提唱によってユネスコの成人教育推進国際委員会において生涯教育が取り上げられ、生涯における体育、スポーツ、余暇教育の重要性も説かれた。テニスも生涯スポーツの一つのため、この章では生涯スポーツの歴史と定義について述べていく。まずは生涯スポーツの歴史についてである。

20 世紀における生涯スポーツムーブメントの源流は、旧西ドイツが「誰もが」「いつでも」「どこでも」スポーツ・身体活動に参加できる生涯スポーツ政策として 1959 年に始めた「第 2 の道」と 1960 年から 15 年計画で旧西ドイツ全国にスポーツ施設を建設する計画として実施された「ゴールデン・プラン」にあるといっても過言ではない。国の威信をかけたエリート選手の育成を「第 1 の道」とすると、一般市民がスポーツ・身体活動に参加できる別の道、すなわち「第 2 の道」はすべての国民がスポーツ参加の権利を持てる生涯スポーツ政策である。都市化と産業化がもたらしたスポーツの大衆化が 1960 年代に始まり、スポーツを一握りのエリート選手だけのものとせず、国民の健康と福祉にスポーツは必要不可欠と考えた旧西ドイツ政府は、生涯スポーツの普及計画を立て、全市民がスポーツを享受できるように運動施設の整備と確保、充実に 15 年間という長期的な計画のもとで進めた。

1967 年、旧西ドイツの「第 2 の道」政策の目玉プログラムで、心と体のバランスをスポーツ・身体活動で取り戻そうというノルウェーで始まったトリム運動が、1970 年に「第 2 の道」のメインプログラムに組み込まれ、トリム運動としてヨーロッパ大陸から全世界に発展していった。トリム運動はイギリス政府に大きな影響を与え、イギリススポーツ審議会は予算配分などの権限を持つ独立機関として「みんなの生涯スポーツ」の意味である“スポーツ・フォー・オール”を 1972 年に宣言し、生涯スポーツ時代の幕開けを迎えるのである。

ドイツとイギリスに端を発したスポーツ・フォー・オールの潮流は、健康・体力づくりやスポーツの問題について国際交流を図ろうとする気運をヨーロッパ諸国にもたらし、1975 年の第 1 回欧州スポーツ閣僚会議において 8 条からなる「ヨーロッパ・スポーツ・

フォー・オール憲章」の採択勧告が行なわれ、スポーツ・フォー・オールムーブメントに弾みがつき、世界的な運動に広がったのである。

そして 1992 年の第 7 回欧州スポーツ閣僚会議では、新しいヨーロッパ共同体制に適合させるために「新ヨーロッパ・スポーツ憲章」を加盟国 12 カ国満場一致で採択し、翌 1993 年に発布した。新憲章からは「フォー・オール」がなくなり、生涯スポーツが一般大衆の生涯スポーツに止まらず、エリートレベルやプロスポーツへの支援をも含む広範囲な立場にあることを示している。

生涯スポーツが時代の潮流になった理由がもう一つある。それは工業先進国が抱える社会問題への対処策的発想として出発したことである。いわゆる都市化、高度情報化、先端技術化社会がもたらした国民生活や労働の質の変化による運動不足病、生活習慣病の増加とコミュニケーション欠如がもたらす人間性や生きがいの見直しに対する解決策として、スポーツや身体活動が注目を浴びたのである。そして、21 世紀を迎え、急増する高齢者への健康づくりと生きがい提供および国民医療費削減の必要性という高福祉社会の行き詰まりへの解決策として期待されている。では「生涯スポーツ」とはなんであろうか？「スポーツ・フォー・オール」は 1970 年代からみんなのスポーツとして定着してきた。しかし、1988 年の旧文部省体育課の改組により「生涯スポーツ」となった。依然としてきちんとした定義がなされていないのが現状である。

ではわが国におけるスポーツ実施はどのような状況なのであろうか。そこで第 3 章ではわが国のスポーツ実施状況を述べている。わが国においても近代スポーツが盛んに行なわれてきた。また、生涯スポーツの必要性も叫ばれてきた。そのようななかでわが国のスポーツ実施状況はどのような状況なのか知っておく必要がある。この章では SSF 笹川スポーツ財団が 1992 年以来、隔年で実施している「スポーツ活動に関する全国調査」に基づきわが国のスポーツ実施状況について述べておく。まずは成人の運動・スポーツ実施状況についてである。

この調査では過去 1 年間にまったく運動・スポーツを行わない水準を「レベル 0」、年 1 回以上週 2 回未満の水準を「レベル 1」としている。実施頻度が週 2 回以上を「レベル 2」とし、そのうち 1 回あたりの運動に 30 分以上の時間を費やす水準を「レベル 3」、さらにその「レベル 3」のなかで主観的な運動強度がややきつい以上を「レベル 4」としている。「レベル 4」はアメリカスポーツ医学会や厚生労働省が推奨する運動水準を考慮した指針であり、SSF 笹川スポーツ財団ではこのレベルに達している人々を「アクティブ・スポーツ人口」と定義している。調査開始以来、アクティブ・スポーツ人口の割合は着実に増加している。「レベル 3」も同様の傾向にある。「レベル 4」と「レベル 3」を合計した 3 割強が実施頻度のみならず運動時間を考慮した質の高い運動・スポーツ水準にあり、この背景には、生活習慣病予防、体形の維持、健康・体力づくりへの関心の高まりなどがあげられる。また、「レベル 0」、「レベル 1」の割合が減少傾向にあることもみのがせない。この背景にも健康・体力づくりへの関心の高まりなどがあげられる。今後はアクティブ・スポーツ人口の増加を目指してスポーツ振興を行っていかなければならない。続いて性別、年代別にスポーツ実施状況をみていくことにする。性別に見ると、アクティブ・スポーツ人口の割合は男性が女性をわずかに上回りながら、ほぼ同様の増加傾向を示している。これらの結果から、①定

期的な運動・スポーツ実施者の割合は増加傾向にあり、男女差は小さくなっていること、②イベントなどの不定期なスポーツ参加者の割合は、男性が女性よりも多く、これがスポーツ実施率の男女差を生んでいること、などが分かる。年代別に見ると、「レベル 2」から「レベル 4」を合計した定期的（週 2 回以上）な運動・スポーツ実施者には、特徴的な年代間の差は見出せない。しかし、「レベル 0」は年代が高くなるにつれて増加し、不定期な実施者である「レベル 1」は年代が高くなるにつれて減少している。これは加齢に伴い、運動・スポーツを実施するグループと実施しないグループに二極化する傾向を示しているといえる。性別に見るとスポーツ実施率においても男女差が無くなってきたということは良いことである。女性の運動・スポーツに対する意識の変化や社会における地位の向上などが影響している。また、今後の少子高齢化社会に向けて青少年と高齢者をターゲットとしたスポーツ振興プログラムを構築していき、高齢者の運動実施率の二極化防止のために高齢者の運動実施率を増加させていかなければならない。

次に青少年の運動・スポーツ実施状況である。SSF 笹川スポーツ財団では、わが国の青少年のスポーツ実施状況を把握するため、2001 年と 2005 年に「10 代のスポーツライフに関する調査」を実施した。この調査結果からわが国における青少年の運動・スポーツ実施状況をみていくことにする。過去 1 年間に運動・スポーツをまったく行なわなかった者を「レベル 0」、年 1 回以上週 1 回未満を「レベル 1」、週 1 回以上 5 回未満を「レベル 2」、週 5 回以上を「レベル 3」としている。さらにこの頻度を満たす者で、主観的強度ややきつい以上の運動を 1 回当たり 120 分以上行なっている水準を「レベル 4」としている。なお、青少年の運動・スポーツ活動については、学校の授業は除かれている。

2005 年のスポーツ実施レベルを見ると、「レベル 0」の者は 11.7％と全体の 9 人に 1 人にとどまり、「レベル 2」が約 8 割、「レベル 3」以上が 5 割となっている。

まず、青少年と成人の体力や社会環境の違いを考慮し、成人とは異なるスポーツ実施レベル設定をしている。また、今後の少子高齢化社会において生涯スポーツはどのような方向に進んでいくべきなのであろうか。そこで第 4 章では生涯スポーツの方向性を述べている。2001 年の調査と比較すると「レベル 1」が 19.4％から 9.6％に減少するとともに、最も活発な「レベル 4」が 20.3％から 28.5％に増加するなど、10 代の運動・スポーツ実施率が上昇していることが分かる。

性別に見ると、「レベル 0」が男子の 7.3％に対して女子が 16.1％、「レベル 4」が男子の 33.0％に対して女子が 24.1％となるなど、男性が女性に比べてスポーツ実施率が高いことが分かる。学校期別に見ると、「レベル 0」の割合は、小学校期 2.8％、中学校期 6.1％、高校期 15.6％、大学期 24.0％と学校期が進むにつれて増加している。また、「レベル 4」の割合は中学校と高校でそれぞれ46.4％、36.9％と高く、学校運動部活動による活発なスポーツ活動の現状が見て取れる。15－19 歳の勤労者は「レベル 0」の割合が 35.7％と最も高く、「レベル 2」以上が 32.9％と全体の平均の半分以下になるなど、他の学校期と比べてスポーツ実施率が著しく低い。学校の施設や運動部活動・同好会などが、青少年の運動・スポーツ活動の基盤となっていることを裏づけるデータと見ることもできる。成人のスポーツ実施状況としては「レベル 0」、「レベル 1」が減少傾向にあり、アクティブ・スポーツ人口が増加傾向に

ある。また、性別差もなくなってきている。しかしながら、年代別に見ると加齢に伴い、スポーツを実施するグループと実施しないグループの二極化傾向がある。このまま高齢化時代に突入するとこの二極化は益々極端なものとなるであろう。

また青少年のスポーツ実施状況としては、成人とは異なるスポーツ実施レベル設定を行なっているが成人同様に「レベル 0」、「レベル 1」が減少傾向にあり、アクティブ・スポーツ人口が増加傾向にある。しかしながら、学校期別に見ると高校期と大学期の間で「レベル 0」、「レベル 1」が極端に増加する。これは日本のスポーツが学校部活動中心で実施されているからであろう。大学に入ると部活入部者が減少する現状がある。学校部活動以外のスポーツ活動の環境の整備、高校から大学へ進学してもスポーツを実施できる環境づくりやスポーツ振興プログラムなどが必要である。また、今後の少子高齢化社会において生涯スポーツはどのような方向に進んでいくべきなのであろうか。そこで第 4 章では生涯スポーツの方向性を述べている。

近代社会においてコミュニケーション不足が顕著である。特に核家族化、マンションの分譲、経済優先の工業化などの要因から都市における地域への帰属意識が低下している。そこで、今後の生涯スポーツの方向性を述べる前に、スポーツを通してコミュニティを形成しようというコミュニティ・スポーツについて述べておく。コミュニティは、地域社会や共同社会と訳される。ヒラリーによるとコミュニティの要素は、「社会的相互作用（社会関係）」、「共通の絆（意識）」、「地域性」である。すなわちコミュニティとは、一定の地域において自主性、主体性を自覚した住民がその地域への帰属意識を持ち、かつ日常的に相互作用が見られるような社会を意味する。日本では 1960 年以降、経済優先の政策のもとで工業化、都市化の進行が著しくなり、様々な公害と共に生活環境の破壊がもたらされた。また、人間関係の希薄化、縮小化が進み、地域社会の崩壊という現象が見られるようになった。このような背景の下で、心の触れ合う地域社会の形成を目指して強調されるようになったのがコミュニティ・スポーツであった。つまり、スポーツを通じてコミュニティの形成を図ろうとするものである。

コミュニティ・スポーツという用語が初めて公的に使用されたのは、1973 年の経済社会基本計画においてであった。コミュニティという用語は地理的規程を重視した日常生活圏として捉え、概して学校や職場での体育・スポーツを除いた地域でのスポーツを意味する用語として使用されることが多かった。

コミュニティ・スポーツは地域スポーツとほぼ同義に用いられることもある。しかしながら、コミュニティ・スポーツはコミュニティ形成に機能するようなスポーツであることが強調されるべきである。したがって、コミュニティ・スポーツはコミュニティとの結びつきにおいて、つまり、コミュニティの施設、場所を住民が主体的に活用する中で、社会関係や共通の絆が強化されるといったコミュニティ形成の要素を含んだ形で営まれるスポーツとして捉えてよい。

コミュニティ・スポーツが提唱されるのは、1970 年代後半から 80 年代にかけてであり、この時期は社会体育の主要な課題であるという認識がされていた。

次に生涯スポーツの方向性についてである。スポーツ施設の拡充整備や指導者の育成などスポーツ環境が整備される中でさらなるスポーツ参加の促進を図るには生涯スポーツ

のプログラムやイベントの改善がこれからの課題となろう。

日本ではこれまで生涯スポーツというと高齢者を対象としたウォーキングやグランドゴルフ等の運動強度の弱い種目がイメージされたり、チャンピオンスポーツの対極と位置づけて勝敗にこだわらない参加型のレクリエーションスポーツと解釈されやすかった。競争する相手が人か、時間か、自然かは別として自分の体力と技術、戦術、及び運を駆使してレベルの接近した相手と競い合うことはスポーツの醍醐味の一つである。また、競争の結果が未確定という点もスポーツの醍醐味の一つである。どちらが勝つか分からない状況が出現するためには、競争する双方の体力、技術、戦術にそれほど差がないことが条件となる。これはレベルが明らかに違う者同士を平等に競争させるのではなく、レベルが接近したもの同士を競争させるという公平性を基盤とした文化ということになる。

アメリカの社会心理学者チクセントミハイが提唱しているフロー理論（「何の利益もないのに何故人はスポーツに夢中になるのか」を解明した理論）でも、甲乙つけがたいレベルの相手や対象物との競争が運動やスポーツに熱中したり、没頭して楽しむ秘訣であると述べ、レベルに応じた公平性の重要性を示唆している。この公平性とは、体重制のテコンドーやボクシングにして同じ体格レベルでの競争を設定したり、ハンディキャップ制をゴルフなどに導入して強さなどのレベルを同等にすることで競争結果が未確定になるように設定しているのである。レベルの異なる者同士でもハンディキャップなどを設定すれば、競技性がより高まる。生涯スポーツにはこの公平性を基盤としたルールの導入や柔軟性という「ローカルルール」(対象者の年齢・体力・技術・目的に応じてルールを柔軟に変化させたルールのこと。)思考が不可欠となる。

エリートスポーツと生涯スポーツの違いは、スポーツの質的特性というよりも出場資格が緩いか厳しいかである。いいかえると、エリートスポーツがあらゆる方法で排除して、一握りの人数に絞り込む排除の論理である。一方、生涯スポーツはあらゆる参加者に門戸を開放する需要の論理とも言える。年齢や技術レベルに関係なく、スポーツの楽しさは試合を数多く経験することによって深まり、季節や場所に応じて色々なスポーツに親しむことでスポーツが日常生活に溶け込んでくる。

次に試合中心のスポーツ文化についてである。スポーツにおいて欧米と日本で顕著に異なるのは試合、ゲームに関する意識である。先にも述べたがスポーツの楽しさは試合を数多く経験することで深まる。しかし、日本では試合やゲームを楽しむことよりも技術習得のための反復練習に多くの時間を割く傾向がある。試合の勝敗に一喜一憂し、すぐに結果を求めたがる指導者や保護者が、こうした状況を助長しているケースは少なくない。試合の中で発見した課題を練習で主体的に克服しようと考える欧米とは全く逆の発想である。

日本においても「はじめに試合ありき」の欧米の発想に転換し、もっと試合をしていかなければならない。試合にはチーム内における紅白戦や試合形式の練習も含まれる。練習は試合の補完作業である。勝つことは嬉しいし負けることは悔しい。もっと上達したいという気持ちが練習のモチベーションとなる。

また、青少年における試合の機会均等の問題で避けて通れないのは、学校運動部の補欠である。中体連、高体連の既存の大会のみでは出場機会の均等は不可能に近い。そこで、

別の枠組みで試合を運営することを考えるのが現実的な解決策といえる。

次にテニスとはどのような起源があり、現状はどのようなものなのであろうかということを知るために第 5 章ではテニスの歴史と現状を述べている。近代スポーツであり、生涯スポーツでもあるテニスのはじまりは一体何であったのであろうか。テニス型の球技または「球戯」の起源は、紀元前 3000 年にまでさかのぼるといわれている。古代エジプト時代にナイル川のデルタ上のチニス「Tinnis」、またはタミス「Tamis」と呼ばれた町で行なわれたボールゲームが発展したとか、ペルシア地方の古い球戯の一つから生まれたなど多くの説がある。テニスの原型として一般的に認知されているのがジュ・ドゥ・ポーム「Jeu de paume」である。ジュ・ドゥ・ポームとは手のひらの意味で都市の貴族階級を中心に好んで行なわれた。ボールをロープ（後にはネット）の上越しに相手に素手ないし手袋をつけて打ち返し、得点を競った。初めは聖職者に、その後は貴族階級を中心に流行し、他の階級の人々はプレーを禁じられていた。多くの王はポーム禁止令を出していたが、日曜日だけは例外とし、ポームを賭けの対象にして賭金の一部を国庫収入にしたと言われている。それだけ人気があったといえよう。

イギリスへは 14 世紀半ばにフランスのピカルディ公エンゲランの娘、マリー・ド・クーシを護衛してきた騎士たちによって伝えられたと言われている。

イギリスの詩人ジョン・ガウワーが 1399 年に表した「平和を讃えて」の詩の中に「TENETZ」とのスペルがあり、これがテニスの語源ではないかと言われている。いずれにせよ中世のこの時期にフランス生まれのポームはイギリス、スペイン、ドイツなどヨーロッパ各地へ広まっていった。

16 世紀にはいるとポームはますます盛んになり、手のひら代わりにラケットが使われるようになってきた。1505 年には初めての国際試合がウインザー城でオーストリア大公フェリッペとドーセット候の間で行なわれた。ポームの人気が高まるにつれ各地で専用コートが建設された。そして、17 世紀には他の類似の打球戯と区別するためポームをリアルテニスと呼ぶようになった。テニスも元々はジュ・ドゥ・ポームという遊戯から始まり、リアルテニスと呼ばれるようになり世界で普及、発展してきた。これらのことから遊戯性、競争性、身体活動性を含んだスポーツであると言える。

次に日本におけるテニスの普及と発展についてである。日本のテニス普及に軟式テニスが果たした役割は極めて大きく、この点は欧米諸国に見られない日本独特の発展過程である。日本にテニスが入ってきたのは定かではないが、イギリスで近代テニスが始まった 1873 年の 1、2 年後には神戸の外国人居留地にテニスコートがあったと言われている。正式に日本に紹介されたのは 1878 年、旧文部省に体育伝習所が開設されてアメリカからラリーランドが教師として就任し、テニス用具を取り寄せて学校体育の一環として指導したのが最初である。しかし、ラケットもボールも輸入品で当時の一般の日本人には高価すぎて普及するにはいたらなかった。

1890 年にテニスを学校体育に取り入れる意図で、玩具用ゴムまりをつくっていた三田土ゴム会社にテニス用のゴムボールの生産が依頼され、軟式用のボールが作られ始めた。こうして始まった軟式テニスが早いスピードで全国に広がっていったのは、東京高等師範学校に取り入れられ、そこで習った学生たちが

各地の学校に赴任して軟式テニスを指導するという形で広く地域に根を広がっていったからである。このように軟式テニスは学校を中心にして急速に普及していった。一方の硬式テニスは横浜、東京、軽井沢などで細々と続けられた。

それ以降徐々に増えてきたテニス人口が急速に増えたのは 1959 年の現平成天皇と美智子妃のご成婚によってである。また、経済の復興などもあってテニスコートの増設、テニス人口の増加をみた。1967 年には日本で初めての民間テニススクールが東京で営業を開始し、従来の学校のテニス部とごく限られた個人によるコーチという指導体系から組織化への道が進められた。ビジネスとしての指導へと大きく間口を広げ、テニスに親しむ機会のなかった一般の人や子どもたちへの普及も行なわれるようになり、テニスは質、量ともに改善された。

最後に第 6 章にて本研究の目的であるインスピリッツテニスクラブにおけるスポーツ振興について述べている。

ジュ・ドゥ・ポームから普及、発展してきたテニスは今もその進化を続けている。先に述べたとおり、テニスの楽しみ方の多様化が進んでいる。しかしながら、テニス界においても試合、ゲームに関する意識は欧米に比べると低い。テニス人口の増加はみられるもののテニスクラブが次々に減少している。そんななかで、2005 年 2 月 2 日、「試合に勝つためのテニスクラブ」としてインスピリッツテニスクラブが設立された。そして、約 2 年の時が経った現在、来場者が徐々に増加してきた。特にここ半年は急激に来場者の増加がみられる。しかし私は、試合に勝つためのテニスクラブだけで良いのだろうか、と考えた。そして、調査を進めていく上で次のような要素がインスピリッツテニスクラブにおけるスポーツ振興に含まれていることが分かった。①スポーツの遊戯性、競争性、身体活動性の要素②試合中心の要素③コミュニティ・スポーツの要素④スポーツ・ボランティアの要素である。さらにそのなかでも 2 点ほど気になったことがある。まず 1 点目は、わが国にたくさんテニスクラブがあるにもかかわらずなぜお客さんはインスピリッツテニスクラブに来るのか、ということである。そこで、2006 年 7 月 14 日から 8 月 14 日にかけて質問紙法によるアンケート調査と聞き取り調査を行なった。そして 2 点目である。これは調査に行っていた際に最も気になった点で、スポーツ・ボランティアの存在についてである。インスピリッツテニスクラブにてスポーツ・ボランティアをしている 1 組の親子にスポットをあてて 2006 年 12 月 18 日から 29 日までインタビュー調査などを行なった。その 2 つの調査を中心にインスピリッツテニスクラブのスポーツ振興について述べていくことにする。まずここでは 2004 年 9 月に増田氏に行なったインタビューをもとにインスピリッツテニスクラブが設立されるにあたっての経緯を述べておく。インスピリッツテニスクラブの代表は増田氏である。増田氏は小学 2 年生の時にテニスをはじめ大阪で始めた。小学 3 年生の時に現在のさいたま市（旧与野市）に引越し、テニススクールで週 1 回のレッスンを受けていた。この時にお世話になったコーチは現在もお世話になっている。高校進学後テニス部に入部し、大学入学後、本格的に大会に参戦しはじめた。また、選手として活動すると同時にテニススクールでコーチとしても活動し始めた。この時に有名な選手やコーチとの出会いがあり、共に練習をするようになった。増田氏は「練習では良いプレーがで

きるが、試合になるとできなくなってしまう。緊張したり、失敗を恐れて普段どおりのプレーができない。試合で失敗するので練習を繰り返す。練習のための練習になってしまっていた。」と言ってた。そんな増田氏が有名選手たちと自分の差を見つけるため分析をし、その結果決定的な差を発見した。「強い人たちは試合でも練習でも具体的な目標を決め、それに向かってチャレンジしていく。具体的な目標に向かっていくためミスを恐れずにチャレンジできる。その様な状況で数多くの試合を重ね、試合も練習も変わらない技術を発揮できるようになっている。」このような差があり、増田氏には無かった考え方だと言っていた。試合に勝てる人と増田氏との差は体力や技術よりも心理面での差があったのである。そのような発見から「練習のための練習ではなく試合のための練習でなくてはいけない。練習をすれば練習が上手くなる。ということは試合もたくさんすれば上手くなるのではないだろうか。それならば試合をたくさんしてみよう。試合を練習と同じ感覚で行なうことで試合にも慣れる。試合でできたこと、できなかったことを練習で修正して試合を行なう。この繰り返しが必要である。」ということに気づいたと言っていた。これは第 4 章第 1 節生涯スポーツの方向性や第 4 章第 3 節試合中心のスポーツ文化の提案で述べたとおり、「はじめに試合ありき」の発想である。すなわちインスピリッツテニスクラブではスポーツの特性でもある遊戯性、競技性、身体活動性をいかし、試合中心の要素が含まれたスポーツ振興プログラムの提供が第 1 の狙いであると言える。増田氏は「テニスを通じて知り合った仲間たちの存在も大きい。」と言っていた。増田氏はテニスを通じてコミュニティを形成していたのであろう。このような経験と分析のもと他のテニスクラブとは違う形のインスピリッツテニスクラブを設立した。増田氏のこのような思いから設立されたインスピリッツテニスクラブではあるが試合中心のプログラムは果たして成功しているのであろうか。

インスピリッツテニスクラブを研究調査地に選び、調査を進めていくうちに感じた 1 点目の疑問は「なぜお客さんはインスピリッツテニスクラブに来るのか」ということであった。そこで、2006 年 7 月 14 日から 8 月 14 日にかけて質問紙法によるアンケート調査と聞き取り調査を行なった。回答数は 100 で男性 72 人女性 28 人であった。性別は男性が 72 人で女性が 28 人であった。普段の来場者をみても男性が多いので、女性の来場者増加が今後の課題である。年代別に見ると男性は 40 代が 26 人、次いで 30 代が 24 人、20 代が 12 人となっている。男性はある程度仕事が安定してきて時間に余裕が出てきている世代が多く来場している。女性は 30 代が 13 人と一番多く、次いで 20 代、40 代となっている。女性は主に主婦層が多い。全体的にみるとやはり 30 代、40 代が多い。10 代のジュニア層と 50 代以上のシニア層の取り込みが今後の課題である。

次に居住地であるが全体的にみて埼玉県が 59 人と群を抜いて多く、次いで東京都、千葉県、神奈川県となっている。さらにそこから埼玉県内の参加者のみどこの市町村に住んでいるか居住地を分析してみた。男女共にさいたま市が一番多く次いで富士見市、ふじみ野市とさいたま市に隣接した市町村からの参加が多い傾向にある。インスピリッツテニスクラブが今後、地域におけるスポーツ振興を目指すためにはこの結果は良かったのではないだろうか。

第 3 にテニスをはじめたきっかけとテニス

歴である。テニスをはじめたきっかけとしては、男性、女性ともに趣味、体力づくり、ブームにのってという回答が僅差で続いている。テニス歴であるが、男性は 10－14 年が一番多く、次いで 15－19 年となっている。女性は 0－4 年が一番多く次いで 20 年以上となっている。男性は比較的テニス歴が長い人が多く、女性はテニス歴が短い人と長い人で 2 極化している。

第 4 にスポーツ歴であるが、男性は野球が１８人、サッカーが 17 人、合わせて 35 人と圧倒的に多い。また、スキーが次いで 13 人であったことが驚いた。聞き取り調査をしていると夏はテニス冬はスキーという人が多く見受けられた。女性はバレーボールが一番多く、次いでバスケットボールであった。色々なスポーツ歴をもった人がテニスをしているという点はテニスが手軽に行なえるスポーツであるといえる。

第 5 にテニスの活動場所についてである。男性はサークルが一番多く、次いでテニスクラブ、スクールでどれも僅差である。これは男性のテニス歴の長い人が多いことも関係していると思われる。女性はスクールが一番多く次いでテニスクラブ、サークルとなっている。こちらは女性のテニス歴の短い人が多いことも関係していると思われる。

第 6 にインスピリッツテニスクラブを知った理由であるが、全体的に見ても口コミが断然多い。次いでインターネット、雑誌となっている。口コミが多い理由の一つとして、様々なコミュニティが形成されることにより人々の話題となったであろうと思われる。

第 7 に初めてインスピリッツテニスクラブに来た理由である。男性は値段的条件が一番多く、次いで、地理的条件、試合に勝ちたいからとなっている。やはり、試合参加費の安さや、居住地からの近さが初めて来場する要因になっていると思われる。女性は、試合に勝ちたいからが一番多く、次いで、雰囲気、レベル分けされているからとなっている。これは女性のテニス歴の 2 極化の特徴が出ていて、テニス歴の長い人は試合に勝ちたいという志向で、テニス歴の短い人はレベル別に分かれていることや雰囲気が良いことで行きやすさを感じるのではないだろうか。

第 8 にインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由である。男性は試合に勝ちたいからが一番多く、次いで雰囲気、地理的条件となっている。繰り返し来るうちに試合が楽しくなりまた試合をしたくなる人と、雰囲気の良さで繰り返し来るようになる人が Q7 に比べると増加した。女性は試合に勝ちたいからが一番多く、次いで雰囲気、レベル別に分かれているからとなった。女性も男性同様試合の楽しさと雰囲気の良さを理由に繰り返し来るようになる人が A7 に比べて増加した。

そして、A7 と A8 を比べると最初は地理的条件、値段的条件で来場していた人が多かったが、後に試合に勝ちたい人、雰囲気のよさで来る人が増加した。これは、試合中心の考え方が浸透している結果、また、様々なコミュニティの形成による結果であると思われる。

これらの結果から参加者のテニス歴とテニスの活動場所、初めてインスピリッツテニスクラブにきた理由と繰り返しインスピリッツテニスクラブに来る理由に注目して以下の 4 つを分析した。①テニス歴とテニスの活動場所の関係について②テニス歴と初めてインスピリッツテニスクラブにきた理由の関係について③テニス歴とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由の関係について④参加者の住居（さいたま市・富士見市・ふじみ野市）とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来

る理由の関係についてである。

まず、テニス歴とテニスの活動場所の関係についてである。

テニス歴 0－4 年の人たちはスクールで活動している人たちが多く、次いでテニスクラブや部活で活動している人たちが多かった。スクールや部活といった指導を中心に行なってくれる所で活動している人が多い。また、テニスクラブで活動している人たちは知人に誘われてという理由が多かった。

テニス歴5－9年の人たちはスクールとサークルで活動している人が一番多く、次いで部活が多かった。スクールや部活は指導を中心に行なってくれるが、サークルではお互いがある程度の技術に達しているため打ち合いの練習が多く、それ以外は対抗戦などの試合が多い。よって、この層はスクールや部活のような指導中心の活動場所への参加者が多いがサークルのような試合中心の活動場所への参加者も増えている。

テニス歴 10－14 年の人たちはテニスクラブで活動している人たちが一番多く、次いでスクール、サークルの順であった。テニスクラブも指導系の練習はあるものの仲間同士が集まっての打ち合いや試合が中心の活動場所である。この層はスクールを活動場所にしている人が多いもののテニスクラブやサークルのような試合中心の活動場所で活動している人が多い。

テニス歴 20 年以上の人たちはテニスクラブで活動している人が一番多く、次いでサークル、スクールの順であった。この層ではほとんどがテニスクラブで活動していて、スクールは 1 人であった。指導を受けるよりも試合などの実践を積むための活動場所で活動をしている人が多い。

これらの結果からテニス歴とテニスの活動場所であるが、テニス歴が短いほどスクールや部活といった指導中心の場所で活動している人が多く、テニス歴が長くなればなるほどテニスクラブやサークルなどの試合中心の場所で活動している人たちの割合が多くなるという関係がある。テニス歴 10 年未満の人たちはスクールや部活といった指導を中心に行なってくれる所で活動している人が多い。これに対してテニス歴 10 年以上の人たちはテニスクラブやサークルでの活動が多く見受けられる。これはある程度技術が上達してきて仲間同士で打ち合いを出来るレベルに達しているため、また、対抗戦などの試合を行なうためにテニスクラブやサークルにて活動している人が多いと言える。

次にテニス歴と初めてインスピリッツテニスクラブにきた理由の関係についてである。テニス歴が 0－4 年の人たちが初めてインスピリッツテニスクラブにくる一番の理由は僅差ではあるが雰囲気の良さやレベル分けがされているためである。テニス歴が短い人たちにとってインスピリッツテニスクラブの雰囲気の良さや同じレベルの人たちと行なえることが安心感となり初めて参加しようとした傾向があると言える。次いで地理的条件がよいからである。これは主にさいたま市、富士見市、ふじみ野市と主にインスピリッツテニスクラブ近隣の市に在住している人からの意見である。やはりクラブへのアクセスの良さは重要な条件の一つである。また、初めて来る要因として値段的条件や試合に勝ちたいからといった人たちは少なかった。

テニス歴が 5－9 年の人たちは値段的条件と試合に勝ちたいからと言った理由で初めて参加する人が 1 番多かった。次いでレベル分けされているから、雰囲気であった。この層の人たちは様々な要因でインスピリッツテ

ニスクラブに初めて参加していることが分かる。

テニス歴 10－14 年の人たちは値段的条件で参加している人が一番多く、次いで試合に勝ちたいからであった。この層の人たちは試合経験者が多く、インスピリッツでは他の試合よりも安く試合が出来るために参加する人たちや試合の経験をたくさんつみたい人たち、試合にはたくさん出場しているがなかなか勝てなくて試合を行ないたいからという参加者が多い。

テニス歴 15－19 年の人たちは値段的条件で初めて参加した人が一番多く、次いで地理的条件で初めて参加した人が多かった。雰囲気が要因となって参加している人は 1 人もいなかった。この層の人たちは試合の値段の安さや試合経験をたくさんつみたい人たちが参加している傾向がある。

テニス歴 20 年以上の人たちは値段的条件と試合に勝ちたいからが一番多く次いで、地理的条件とその他の理由が多かった。この層の人たちは試合の値段の安さも大きな要因の一つではあったが試合の調整のために参加している人が多かった。

これらの結果から、テニス歴と初めてインスピリッツテニスクラブにきた理由であるが、テニス歴が短い人たちほど雰囲気やレベル分けがされているために参加する人が多く、テニス歴が長くなるほど値段的条件や地理的条件試合に勝ちたいから参加した人が増え、試合志向が強くなるという関係がある。また、この表の中の中間のテニス歴の層の人たちはこれらの差は少なく様々な要因で初めて参加していたと言える。

次にテニス歴とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由の関係についてである。テニス歴 0－4 年の人たちは雰囲気とレベル分けされているからという要因は繰り返し来る理由としても相変わらず多かったが、試合に勝ちたいからといった理由が一番多かった。これはインスピリッツテニスクラブで試合に何回か出場していくうちに試合経験の重要さ、勝つ楽しさ、負ける悔しさ、チャレンジすることなどを経験したからであろう。この層の人たちはスポーツの特徴の一つである競争性を、試合経験を通して求める人たちが増えた結果であろう。そして、増田氏のインスピリッツテニスクラブ設立の際の思いである「練習では良いプレーができるが試合になると上手く出来ない」と似たような経験をしている人達が多く存在すると言える。また、この回答をした人たちは勝つためには試合の経験をつむことが大切であると感じ、参加している人が多い。この点は増田氏の考案した試合中心のプログラムは成功していると言える。

テニス歴 5－9 年の人たちはレベル分けされているからといった人たちが一番多く、次いで試合に勝ちたいからという人たちが多かった。レベル別の試合を経験することにより競技性が高まる。また、この層の人たちはテニス歴 0－4 年の人たちと比べると技術力が高い人たちが多く、試合経験もある程度つんでいる。しかし、試合に勝つ経験がテニス歴が長い人たちに比べると少ない。そのため上記の 2 つの理由で繰り返し参加する人が多いのではないだろうか。

テニス歴 10－14 年の人たちは雰囲気という回答が一番多く、次いで試合に勝ちたいからが多かった。この層の人たちは試合に勝ちたいという人たちも多いが、インスピリッツテニスクラブでの他の参加者とのふれあいなどの雰囲気の良さを求めて繰り返し来る人たちが多いという 2 極化傾向にある。

テニス歴 15－19 年の人たちは試合に勝ち

たいからが一番多く、次いで雰囲気が多かった。この層の人たちもテニス歴 10－14 年の人たちと同様に試合に勝ちたい人たちと雰囲気の良さを求めて繰り返し来る人たちの 2 極化傾向にある。

テニス歴 20 年以上の人たちは値段的条件の人たちが一番多く、次いで地理的条件の人たちが一番多かった。この層の人たちは先にも述べたとおり試合の調整のために参加している人が多いので値段の安さやクラブまでの近さがメリットとなって参加している人が多い。

このような結果からテニス歴とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由であるが、テニス歴 20 年未満の人たちはテニス歴に関係なく試合に勝ちたいからと雰囲気をもとめて繰り返し来る人たちの 2 極化の関係にあると言える。そして、初めてインスピリッツテニスクラブに参加した理由と比べると、最初は値段的条件や地理的条件で参加している人が試合に勝ちたいからや雰囲気よりも多かったが繰り返し来る理由としては逆転した。これらは増田氏が考案した試合中心のプログラムが成功していると言える。また、雰囲気を求めてやってくる人たちの中にはボランティア志向が強い人たちもいる。インスピリッツテニスクラブの雰囲気の良さを感じクラブへの帰属意識が高まり、自主的にその他のプログラムに参加している人たちもいるという結果である。すなわち、試合中心のテニスクラブではあるがその他の要素を求めてインスピリッツテニスクラブに来場する人たちもいるのだ。また、テニス歴 20 年以上の人たちは初めてきた理由と変わらず、値段的条件と地理的条件を求めている。

次に参加者の住居（さいたま市・富士見市・ふじみ野市）とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由の関係についてである。今回は埼玉県居住の参加者の中でも多い居住地として多いさいたま市、富士見市、ふじみ野市の上位 3 市について分析していくことにする。

さいたま市在住の参加者は雰囲気が一番多く、次いでレベル分けされているからと試合に勝ちたいからであった。また、他の市と比べると地理的条件と値段的条件で繰り返し来場する人も多かった。これは、同市内にインスピリッツテニスクラブがあるため、交通の便のよさで来場できるからであろう。

富士見市在住の参加者は地理的条件が一番多く、次いで値段的条件、雰囲気であった。値段的条件と地理的条件が多いという点はさいたま市と似た傾向にある。

ふじみ野市在住の参加者は試合に勝ちたいからが一番多く、次いでレベル分けされているからと雰囲気であった。値段的条件と地理的条件が少なく、試合に勝ちたいや雰囲気という結果はさいたま市と似た傾向にある。

いずれも僅差ではあるがこの 3 市全体では雰囲気が一番多く、次いで試合に勝ちたいから、レベル別に分けられているからという結果である。この 3 市はいずれもインスピリッツテニスクラブに近いにもかかわらず、地理的条件は上位にはこない結果になった。

これらの結果から、参加者の住居（さいたま市・富士見市・ふじみ野市）とインスピリッツテニスクラブに繰り返し来る理由についてであるが、インスピリッツテニスクラブに隣接するさいたま市・富士見市・ふじみ野市全体で見ると雰囲気と試合に勝ちたいからの 2 極化傾向の関係がある。また、さいたま市在住の参加者が多く、地理的条件、雰囲気など様々な要因で参加しているということは地域の活性化につながるといえる。

以上の結果からテニス歴の長さによって練習中心志向から試合中心志向に変化している

ことが分かった。また、練習中心志向の人たちもインスピリッツテニスクラブに繰り返し来場することにより徐々に試合中心志向に変化している人も多く見受けられるようになった。また、テニス歴が長い人は値段的条件や地理的条件で参加していたが、雰囲気や試合に勝ちたいからという理由で繰り返し参加する人たちが増加してきた。特にテニス歴 10 年以上 20 年未満の人たちが顕著である。しかし、テニス歴 20 年以上の人たちは値段的条件や、地理的条件で参加している。そして、インスピリッツテニスクラブに隣接する 3 市居住の参加者も雰囲気と試合に勝ちたいからという理由の 2 極化傾向にある。しかし、それぞれの要因の差は僅差で来場者はさまざまなニーズを求めてやってきている。試合に勝ちたいからという理由の参加者が増えたということ、また試合中心志向の人たちが増えてきたということは増田氏の経験から考案した試合中心のプログラムが浸透していると言える。同時に、インスピリッツテニスクラブに居場所を求めてやってくる人たち、帰属意識が芽生えている人たちも増えてきた。これは試合中心のプログラム意外にもテニスやそれ以外のプログラムを通して様々な形でのスポーツ振興に役立っているといえるのではないだろうか。

インスピリッツテニスクラブは毎日試合を行なっているためコーチなどを雇う必要がない。よってそういう面では人件費がかからない。しかしながら、設立段階の施設改修や施設の管理、顧客の増加などにより増田氏 1 人では運営が成り立たない。そこで、増田氏が運営を手伝ってくれるボランティアを募集した。現在核となるボランティアは 6 人でその他に 10 人くらいのボランティアが存在する。そこで、2006 年 12 月 18 日から 29 日まで一組の親子ボランティアに聞き取り調査を依頼した。

A さん、女性、41 歳とその息子 B さん男性、16 歳である。A さんは 13 歳の時に軟式テニスを始め 18 歳まで続ける。「エースをねらえ」のテニスブームがきっかけではじめた。そして、35 歳から硬式テニスをはじめ今に至る。昼間はパート業をする傍らでボランティアを続けている。インスピリッツテニスクラブを知ったきっかけは、前から知り合いであった増田氏にたまたま道端で会って誘われたらしい。当時は、ねっからの試合嫌いで仲間との打ち合いが一番楽しかったそうだ。だから、最初は仕方なく試合に出場した。しかし、出場しているうちに色々な人と試合ができて、試合の楽しさが分かったという。そして、昔から負けず嫌いであったせいもあり、負けている時、苦しい時の自分が好きだという。そしてなによりも A さんはインスピリッツテニスクラブに自分の居場所を求めているという。日常では味わえない非現実的な場所で居心地がとてもよいらしい。近くの芝生で昼寝をすることが特に最高だと言っていた。先ほどのアンケート結果 A7&A8 にもあったとおり雰囲気のよさ求めてインスピリッツテニスクラブに来る人もいるわけだ。こうして居場所をみつけた A さんはインスピリッツテニスクラブに愛着がわいて必然的に来るようになったという。今ではテニスよりも掃除や施設整備、運営をするためにインスピリッツテニスクラブに来ている。

一方 B さんがテニスをはじめたきっかけは親がやっていて興味を持ったそうで 12 歳の時から硬式テニスをはじめた。B さんはテニス以外にも水泳と空手をやっていた。最初は近くの公園で習い始めたテニスも今では高校の部活動に自主練と週 7 日テニスをしてトップを目指している。しかしながら、少子化による影響で高校のテニス部員は少なく、指導者も不足していた。そんな中、母が通いだしたインスピリッツテニ

スクラブにBさんも通い始める。Bさんは試合で勝ちたい、テニスが上手くなりたくてインスピリッツテニスクラブに通い始めた。ボランティアは見学や試合に行ったついでで始めた。しかし、今では増田氏の指導の下、運営などをこなしている。こういったクラブには色々な年齢層の人が存在するので社会のルールや言葉遣い、礼儀作法などを大人から学べるので良い。と言っていた。また母であるAさんも、Bさんのコミュニケーション能力の向上が顕著であると言っていた。

AさんBさんの親子関係はもともとコミュニケーションを頻繁にとったりと良かった方なので著しい変化は無いがテニスに関係する会話が増えたり、インスピリッツテニスクラブに関する話題が増えたそうだ。

AさんBさん共に違った目的を持ってインスピリッツテニスクラブに通っている。Aさんはクラブに居場所を求めたり、ボランティアをすることを第1の目的に通っている。一方Bさんは試合で勝ちたい、上手くなりたいという目的のもと通っている。また、学校ではなかなか体験することのできない他世代間の交流や教育なども体験することができている。

これらの調査からもわかるように来場者はさまざまなニーズを求めてやってくる。また、スポーツの遊戯性、競争性、身体活動性の要素を含んだテニスが、インスピリッツテニスクラブにて試合中心の要素とコミュニティ・スポーツの要素とスポーツ・ボランティアの要素を提供しているといえるのではないだろうか。特にクラブへの帰属意識を芽生えさせ、参加者がスポーツ・ボランティアを自主的に行なうということは多くの他のクラブと違う点あると言える。

第7節はインスピリッツテニスクラブの今後の方向性について以下の様に論じている。

インスピリッツテニスクラブは様々な形でスポーツ振興に役立ってきている。今後は少子高齢化時代になってくる。参加者の少ないジュニア世代とシニア世代の増加のためにローカルルールを作り、ジュニアとシニアを対象にした試合を組み込んだり、PR等をしていかなければならない。

また、試合をしに来ている参加者をスポーツ・ボランティアに多く取り込み、自主的に運営、企画等に参加してもらえる環境づくりが必要である。

第3にスポーツ科学的側面からとらえ、独自の試合に勝つためのシステム作りをする。そうすることで来場者を増やすことも必要である。そして、施設の充実も必要なことである。

以上のことを進めていくにはより地域に密着したイベント作りやPRなどを中心としたテニスクラブづくりが必要であると思われる。以上のことから、インスピリッツテニスクラブにて「試合をする」、「試合に強くなる」という以外の様々な形でスポーツが振興されていると思われる。そして、調査を進めていく上で次のような要素がインスピリッツテニスクラブにおけるスポーツ振興に含まれていることが分かった。①スポーツの遊戯性、競争性、身体活動性の要素②試合中心の要素③コミュニティ・スポーツの要素④スポーツ・ボランティアの要素である。AさんBさんの例もあったとおり、様々な目的を持ってインスピリッツテニスクラブに通っている。試合に勝ちたい、技術を上達させたい、仲間を作りたい、他世代間の交流がしたい、雰囲気が良いから行きたい、ボランティアがしたい、などそれぞれの理由で居場所を求めて人々がやってくる。このようにインスピリッツテニスクラブには様々なことを求めてやってく

ことが分かった。また、練習中心志向の人たちる。最初は試合に勝つためのテニスクラブと称して設立されたインスピリッツテニスクラブも人々のニーズに合った様々な空間を提供している。このような関係がこれからのスポーツ振興にあるべき姿の一つなのではないか。